

研究題目

コロナ禍における音楽科学習の意義と大切さ

～感染症対策と、音楽科での学びの両立を図る試行錯誤と発信～

目次

- I 研究テーマ
- II 研究のねらい
- III 研究の経過と内容
- IV 研究の成果と課題
- V おわりに

I 研究テーマ

音楽から豊かに感じ、思いや意図をもって表現していく音楽科学習

II 研究のねらい

感染症対策のために、本当に制約の多い中で本年度の学習活動は始まった。特に音楽科学習では、歌うことができず、楽器も吹けないために、歌唱・器楽・創作分野での学習はほぼすべてが行えない状況であった。

その中でも、本校全校テーマである「自分の『思い』や『考え』を深め、豊かに表現する力の育成」に寄せて児童の成長する姿を思い描き、音楽科としてできることを求め続けようと動いてきた。

本研究では、音楽を通じた児童同士のかかわりによる学びの実現と、感染症から命を守ることの両立を図り、具体的方策の試行錯誤や発明および発信を行った。

III 研究の経過と内容

1 命、安心安全を守る 「本当に何が大切か」

コロナ禍では私たち大人が本当に何を大切にしているかがよく見えると感じる。本当に大切なのは、子どもの命を守ることであり、学校があるから誰かの命が危険になってはならない。

本校では、給食の配膳や分散しての食事などを行い、学校生活の細部にわたって職員が徹底した感染症対策をしてきた。そのため、感染状況が悪化することが常態化する中にも「このぐらいは大丈夫」という考えや、「感染の危険はないことにしてしまう」考えにはならなかった。その状況にあって、音楽科学習でもマスクをはずさずにできる学習活動のみを進めることを中心とした。

2 鑑賞分野の題材を拡充 「本物を聴かせること」

2020年6月の全国一斉臨時休校明けの当初から、感染対策のために鍵盤ハーモニカとリコーダーは各家庭に置いておくようにした。歌唱や器楽学習がほぼできない状況になるため、鑑賞分野を中心に学習を進めていった。

児童が本当に惹きつけられる鑑賞題材を多くもっていたが、惜しみなく扱って数ヶ月経つと、児童の実態や時期に合わないものだけが残ってきた。時数を消費するだけならいくつも扱う題材はあったが、児童が学びに向かいたくなる「本物を聴かせること」を崩さずにしたと考えた。そこで、他県で採用されている教科書を参考に標題音楽を取り上げて、鑑賞分野で扱う題材を拡充することとした。

<題材1：交響曲「田園」から抜粋 3年>

夏の時期に合わせて鑑賞していた「ゼロ弾きのゴーシュ」の、映画全体で使われている

楽曲とのつながりを生かして、鑑賞曲を新たに教材化した。

資料 1 にあるベートーベンの交響曲第 6 番「田園」の第 2 楽章終末部分を抜粋して、小鳥が楽器で模倣される面白さや音楽的な工夫に着目できるようにした。

Symphony No. 6 in F Major, Op. 68 "Pastoral"

資料 1

<http://ja.cantorion.org/music/1509/Symphony-No.-6>

楽器でかっこの鳴き声が表示されていることに気づいた児童に対して、「場面を想像して聴きましょう」という当たり前の聞き方ではなく、「この部分では何種類の鳥が鳴いているでしょうか」と問いかけた。すると、児童は鳥の鳴き声を表している楽器の音色や重なり方を集中して聴くようになった。資料 2 にあるように、学習カードには「かっこの前にすごい速さで鳴いている鳥がいた感じだった。最後に 1 羽小さい声で鳴いていた」と音楽を具体的にとらえて自分の言葉で表す姿が見られた。

子ども向けに単純化された楽曲ではない長大な交響曲であっても、教材化や問いかけ方によって児童が問いをもって聴き、音楽的な特徴に気づく題材となった。

情景と音楽 ～自然を表す音楽のおもしろさを感じよう～
3年1組

セロ弾きのゴーシュで演奏された「ベートーベンの交響曲第6番」から発見しよう

「かっこの何回
なっているかな？」 自分の答え
8回

いくつの鳥が
出てくるかな？

こんな楽器が使われているけれど、
フルート オーボエ クラリネット
バイオリン チェロ(知)

自分の答え
4羽

りゆうを音楽から書けると◎
かっこの前にすごい速さで鳴いている鳥がいた感じだった。4羽は小さい声で鳴いていた。最後に1羽小さい声で鳴いていた。

ベートーベンについて、正しいものに☑をしよう

- モーツァルトのように、子どもの時からピアノや音楽が上手だった
- 耳がわるかったため、大人になってからはピアノに耳をおつけて自分の音楽をきいた
- 交響曲(こうきゆう)という、長い組曲を全部で9つ作った
- 気むずかしやで、すんでいたアパートの人とよくトラブルになった
- 自然が大好きで、いなかは何ヶ月も出かけて曲を作ることもあった
- メトロノームという機械(きか)を使って曲を作った

資料 2

＜題材2：「ピーターと狼」 3年＞

同じく情景音楽であるプロコフィエフ作曲の「ピーターと狼」を新たに教材化した。

児童が豊かに音楽を感じるために、手立てとして登場人物からピーターとおおかみそれぞれを表すモチーフの対比を扱った。

また、音色や音の特徴を表す言葉を参考の一覧として挙げておくことで、音とイメージをつなげて語り出す児童の姿が見られた。

学習課題：がっきの音色や音楽の感じから表される様子をどらえよう

＜下の言葉をヒントに書こう どんな音色で、どんな感じかな？＞

1 ピーターを表すモチーフ（音楽のテーマ）	2 おおかみを表すモチーフ
・さいしよはゆくりでだんだん ・れ早くなっている ・だんだん高くなっている。 ・少しあかるい	だんだんひくくなっている さいしよはゆくり、 だんだん音がたかくなっている。 なみの時シンバルもつかって

音色や音のとくちょうをこう表すこともあります

あかるい音色 くらい音色 はっきりした音色 ほやけた音色 やわらかい音色
かたい音色 まるい音色 するどい音色 あたかい音色 どうめいな音色
ドンドンという音 カンカンという音 かわいたまうな音 つまった音色
上がっていく音 強くなる音 はねている音 きれいにまなる音

感じをこう表すこともあります

楽しそうな感じ うれしそうな感じ おどっている感じ 走っている感じ
くらい感じ こわい感じ せまってくる感じ にかけていく感じ どんでいる感じ
話している感じ おこっている感じ たたかっている感じ

＜まとめ：こちらもきいてみよう＞

どの場面
でしようか

- 1 おじいさんが ゆっくりおむっているところ
- 2 おおかみが きょうにおどってきたところ
- 3 おおかみをつかまえて まるこんでいるところ

王里由 さいしよはゆくりで早くなっているがピーターが
ふりかえりのしかた
～がわかりました
～がふしぎだと思いました

＜ふりかえり＞

資料3

3 電子楽器による器楽分野の試行

鑑賞分野の拡充を図りつつ、2020年5月の分散登校時から小型の電子鍵盤楽器の確保を進めてきた。呼吸を使わない小型鍵盤楽器を6月半ばには17台そろえて、1学級の児童が半数ずつ交代で楽器を使う活動ができるようになった。資料4のように、広い部屋に小型の電子鍵盤楽器を用意しておくことで、感染対策と準備時間の削減を図った。また、音楽室での鑑賞題材を同時進行する授業展開も考えて、表現や創作分野の学習が進むようにした。

しかし、お互いの持ち物も触れないように心がける状況にあつて、楽器を順番に使いまわすたびに消毒を徹底するには時間のロスが大きかった。

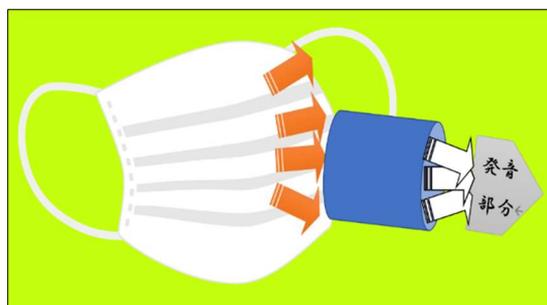


資料4

4 「マスクをしたままリコーダー」の発案

鑑賞と創作分野を先行させた状況で、2020年8月末の感染症の広がりや予想よりも悪化したものとなった。特に3学年は教科書の約半分をリコーダーの題材が占めているために、歌唱や器楽分野が行えないのは学習として非常に厳しいところだった。

ある日「もしかしたらマスクをしたままでもリコーダーの音が出せる！…はずはないか」と思いつき、すぐに試してみた。ところが全く息は入らず、マスクのフィルター効果を抑えた家庭科授業を自分で教材化した直後ということもあり、息や飛沫が通りにくい繊維の様子が容易に想像できた。マスクをうすくのぼしたり深くくわえたりしても、変わらなかった。息の入れ方を試行錯誤している中で、偶然何気なく左手で吹き口をつつんだ時に音は鳴った。そこから、マスクからは分散して息が出て行くので、再びリコーダーの小さな吹き口の穴に息を集めれば鳴るのだと考えられた。資料5のように、穴のないマスクごとに音が鳴る仕組みがイメージできる。



資料5

5 自分しか使わない、ではもったいない

マスクごとにリコーダーの発音部分へ息を集める方法として、当初は100円ショップにあるシリコン製お菓子作りの素材を使っていた。しかし上田市の音楽専科に紹介したところ、「リコーダーの先からは、すぐにとれてしまって遊び道具になってしまいそう」という反応で、改良が必要であることがわかってきた。「作る」にも「使う」にも特別なコツが要求されるようでは、自分だけしか授業で使うことができない。日本中どこでも手に入りやすく、安くて、加工しやすく、手間をかけずに吹き口に変えられるものを探し求めた。また、広く紹介したときに何が起るかも想像し、多くの学校で使う時に品薄になる100円商品では結局意味がないと考え、試行錯誤の末に、太めのホースを切ってはめ込む「吹き口」を考案した。資料6のものであれば、切り分けて1人分は23円で作成できるようになった。



資料6

6 スモールステップ題材によるリコーダー学習

私は、初めて勤めた学校のと時からリコーダーの超スモールステップ楽譜集を作り、少しずつ上達する楽しさを味わうようにと工夫してきていた。資料7にある「リコーダーの大冒険」と題して、左手の運指のみで60までのイベントをクリアする自作楽譜に改訂してきていた。早速3学年の授業でホースを切り分けた「吹き口」を使い、「リコーダー大冒険」のリコーダー学習を始めた。

音を出すこと自体や、スモールステップの合格サインに喜びつつ、上達する児童の姿が見られた。マスクをしたまま演奏できることにより、2メートルの距離をとらずに済むようになり、資料8のように4学年ではペア活動も可能になった。

リコーダーの大ぼうけん ～レフトハンドマスター～

ぼうけんなので、簡単なイベントをすこしとぼしてチャレンジしてもオーケー。「」の曲をリコーダーで吹こう

――息は、体勢や短く、タンギングをする

――のぼしは、のはして、タンギングする

――思われたポイントができてイベントクリア!

イベント1 たびのしたく
左手でもって、音をだそう

2 出発のふえだ!
さきっぽだけで「トオー・トツ」

名前()

3 朝いちばんの森で
さきっぽだけで「ホーホーホー」

4 のらネコに かこまれた!
左手で「シ・シ・シ」と「シ・シ・シ!」

5 たすけをもとめろぞ
SOS (イ オ イ)
「シ・シ・シ・シーシーシー・シ・シ・シ」



資料8

資料7

7 全国の音楽科学習を思ってSNSで発信

9月初めにマスクをしたままリコーダー学習ができるように材料を整え、本校では感染症対策をしながらの器楽や創作分野の学習活動が大きく改善された。それでもインターネットの書き込みなどを見ると「新型コロナウイルス対策のために、リコーダーや鍵盤ハーモニカの運指だけを練習している」「無理をして音楽の授業をやらなくていいのではないか」というものがほとんどを占めていた。

日本中で音楽の学習、音楽活動自体が小さくなっている現状を想像した。今回の方法を広く知って活用、応用してもらうことが全国の音楽科学習のためにも必要だと強く思った。

結果的に、短くわかりやすくまとめて資料9のようにyoutubeで動画を発信することとした。自作した動画は、職場の理解があり、すぐに配信手続きができた。信州大学の先生と、総合教育センターの先生のお力があり、音楽関係の方に一気に広がっていった。



資料9

Youtube 発信の自作動画 <https://youtu.be/WDFvIOkXo>

8 既存メディアの活用による発信

動画の配信に加えて、広く知ってもらうために新聞社に取材依頼の提案をした。

資料10のように、信濃毎日新聞の全県紙面で9月7日には発信してもらうこととなった。児童は取材に対して、「マスクに（吹き口を）くっつけるだけで吹けて楽しい」と話していて、音を通した表現活動ができる喜びが見られた。

また、資料11にあるように、「FMながの」のラジオ番組出演依頼を受けるのをはじめとして、既存メディアを通した発信を行うことができた。



資料10 信濃毎日新聞 2020年9月7日



資料11

9 器楽アンサンブルによる表現活動

本研究で大切にしてきた音楽を通した児童同士のかかわりによる学びの実現と、感染症から命を守ることを両立を図る試みとして、5学年の表現題材を教材化した。

鍵盤ハーモニカ奏者の松田昌 編曲による「家路」を抜粋して扱った。児童同士がかかわり学びを深めるための手立ては次のように考えた。

- ・資料12のように、リコーダーと同様にマスクをしたまま鍵盤ハーモニカを演奏できる「吹き口」を用意して、感染症対策をしつつも多少近づいた距離でアンサンブルできるようにした
- ・なじみのあるメロディと短めの部分抜粋により、繰り返し演奏して工夫を考えやすくした
- ・「ド」だけで演奏できる編曲を取り上げて基本3人のグループを設定することで、息による強弱表現に焦点化できるようにした
- ・作曲者ドヴォルザークの想いがわかる動画を抜粋して扱い、作者の意図や曲のイメージとつなげて工夫できるようにした
- ・資料13にあるように、強弱表現の工夫を楽譜に書き込みやすくし、考えを交換して深められるようにした



資料12

資料13

(児童の姿や学習カードからの考察)

- ・資料14の学習カードにある「強弱を中心に気をつけながらひいた。合わせた時に、自分だけが中心と（おもに、音を大きく）ならないように気をつけた」という児童の工夫と気づきは、強弱の工夫をきっかけとして、合わせる友だちとの音量バランスやパートの役割を意識して演奏しようという学びになっていると考察する。
- ・楽譜や階名を読んで鍵盤を弾くことができない段階の児童が、一つの音でアンサンブルできる曲の部分を教材化した。支援の先生に入ってもらい、休符を数えながら吹くことで合わせられるようになった姿から、技術的な開きがある場合にも、合わせられるような素材選びが重要であることが実感できた。

11月に実践したこの題材では「息づかい」の大切さを実感した。息づかい、という言葉には単なる技術を越えた、表現を支える人の意思や感情も含まれていると考えている。児童は強弱表現を手がかりとして、互いの息づかいを感じ取って表現し、意図や工夫を伝え合っていたのだと思う。

コロナ禍の音楽科学習として、感染症対策と音を通した他者とのかかわりで生まれる学びの両立が結集した授業となった。

友だちと合わせて自分のパートをひきましたか？(はい)もうすこしいいえ)
 ・強弱や息の使い方に気をつけて演奏できましたか？(はい)もうすこしいいえ)
 ・この時間のふりかえりを書きましょう。

強弱を中心にきつながらひいた。合せた時に自分だけが中心と(おにも音も大きく)ならないようにきつながら

ふりかえりの視点に☑しよう
 今日おぼえたことを書く
 考えたことや気づきを書く
 感じたことや感想を書く
 新たな考えや次の問い・疑問を書く
 様々な視点をまじえて書く

資料14

10 コロナ禍で広がった、ひととのつながり

9月中旬に、東京都新宿区の先生から連絡があり、「吹き口」を試してみても感動したことや、それまでは新聞紙を丸めてリコーダー代わりにしていたことを伝えてもらった。東京都の学校で児童が本当に喜んで「吹き口」を使った学習活動をしていることがわかった。

その後、この先生は音楽之友社の編集者とも連絡をつけて「吹き口」の効果と学びの様子を雑誌「教育音楽」で全国発信された。音楽之友社のSNSでも発信されて情報はさらに広がり、私へ直接質問も来るようになった。東京都の世田谷区や三鷹市、静岡県、愛知県の先生方と直接話すたびに、コロナ禍にあってもなんとか音楽科学習を成り立たせようとする先生方の熱意と、自分自身の想いとつながりを感じた。

その後、さらに「吹き口」の材料が手に入れやすくなるように資料15の形に材料の特徴と入手先一覧をWeb公開することで、広く使われやすいように考えた。

また、文科省教科調査官の志民先生から推薦をいただいたことにより、資料16の小学館「教育技術小五・六1月号」にアイデアや活用方法を掲載することで発信を続けた。

2020年の秋が深まり、ようやく感染症の状況が落ち着いたかと思ったところに、東京都の別の先生から電話をもらった。12月に入って東京で感染が再拡大し、1月からは音楽の学習活動がなにもできなくなってしまいそうだった。

前述の、志民先生から推薦をいただいた雑誌と経緯を伝えたおかげで、東京都の先生から「雑誌の記事と『吹き口』の実演を区の教育委員会に見てもらって、『この方法なら大丈夫ですね』と了解をもらいました！」と喜びを伝えてもらった。音楽への想いによって、ひととのつながりが広がったのだと感じた。

実際にリコーダーに取り付けた様子と、ホースごとの特徴など

1 シリコンチューブ

プラス面: 注文して2日前後に届くものが多い ハサミで簡単に切り分けられる
 内径25ミリでも差し込める 子ども自身で着脱できる
 マイナス面: 比較的、値段が高い やわらかく繊維が付きやすい
 ポイント: 4.5センチに切り分けると多くの人数分確保できる




多少短く切って、少し浅めに差し込んだ状態でも、はずれにくく音は出せる

3 簡易配管用チューブ

プラス面: 安価で手に入る やわらかく切り分けやすい 透明でよごれや水滴が見やすい
 マイナス面: 内径25ミリだと切れ目を入れないと差し込みにくい
 ポイント: 暖かい時期の直射日光や、お湯で温めておくのとびて差し込みやすくなる

資料 15

みんなの教育技術

◆ 穴なしのマスクをしたままリコーダー!!

執筆/長野県立小学校教諭・千野 周



自作の「吹き口」を付けるだけで、マスクを付けたまま演奏できる

マスクをしたままリコーダーを吹ける様子



「マスクしたままリコーダー!」の動画 (Youtube) でも紹介中

ここで紹介する「吹き口」は、一般的なマスクを外さずにリコーダーが吹けるというものです。演奏で飛沫が出にくい上に、穴が開いていないマスクごしなので演奏者自身もウイルスなどを吸い込みにくく感染予防に効果的です。

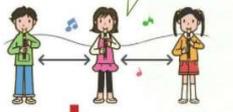
また、吹くたびにマスクをずらしたり、手で触れたりしないので、それだけウイルスが付く危険が減ります。

私の活用方法 アンサンブルや創作にも

鍵盤ハーモニカやリコーダーを半年ぶりに使って実感したのは、音楽の学習では単に「音を出すタイミング」を合わせていたのではなく、お互いの息を感じて音楽をつくっていたということです。リコーダーのペア学習も、ずっと横一列や背中合わせで離れて吹くよりもマスクをしたまま機織を合わせてアンサンブルするほうが、学んでいる内容が充実すると思います。

ペアでの「ほたるこい」や、強弱の表現に感情をのせる「家路」（松田昌 編曲）でも私は活用しています。

並んで吹くのも練習になるけどね。




息を合わせるとやっぱり楽しい!

資料 16 みんなの教育技術 ※資料は web ページ公開のもの

<https://kyoiku.sho.jp/75111/>

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- ・新型コロナウイルスによる異常時の中にあつて、感染対策を崩さずに学習活動の充実を図ることができた。
- ・鑑賞分野での新たな教材化や小型電子鍵盤楽器の活用により、新たな学習活動のあり方を模索することができた
- ・マスクごしに息が入る仕組みを発案したことで、リコーダーや鍵盤ハーモニカといった楽器を感染対策と両立して使用できるようになり、音楽を通した他者との関わりの充実といった音楽科の学習活動の充実を図ることができた。
- ・自作の説明動画や既存のメディアで全国に発信して、感染の広がりや縮小される状況にある音楽科の学習の広がりや寄与することができた。

2 研究の課題

コロナ禍での個別最適な学びと協働的な学びを実現する音楽科学習をさぐる

- ・マスクをしたままリコーダーが演奏できる発案は、息づかいを大切にしたい学びの確保に重要であったが、あくまで既存の学習題材を生かすために活用できる方法だった。
- ・今後も続くと思われるコロナ禍にあつて、音楽科における新たな学び方を探りたい。特に、個別最適な学びと協働的な学びを実現するために、ICT 機器や一人一端末の活用を視点に実践研究して発信をしていきたい。

V おわりに

コロナ禍での多すぎる制約があつた中でも、鑑賞分野の拡充を図り、研究テーマ「音楽から豊かに感じ」を実現する児童の成長する姿につなげることができた。

また、呼吸を使った器楽活動をマスクごしに確保できたことで、「思いや意図をもって表現していく音楽科学習」においても感染症対策との両立を図りつつ実現させることができた。

安心と安全をおろそかにせず、かといって制約があるからと初めからあきらめずに求めつづけてきたことが、この成果につながった。コロナ禍においても音楽科学習による児童の成長と、自分自身が感じたひととのつながりをずっと大切にしていきたい。